日本IT書紀

012 記憶の箱

02 溟渤篇
巻之一 契機

佃 均

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は
https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。

第十二

記憶の箱

一

一九五六年当時の情報産業界について書こうにも調べようにも、まとまった資料がない。仮にあったとしても、それだけに頼ったのでは実感のない空疎な文言を連ねるばかりであろう。

――どうにかして、生の証言を取りたいものだ。

半ば行き詰まりかけたとき、ある人物を思い出した。ずっと以前のことだが、その人が国から何かの表彰を受けたとき、インタビューをしたことがあった。

そのとき、

――一九五二年から六〇年まで、在日米軍の基地で計算機の仕事をしていたんですよ。

と語っていたのを思い出したのだった。

アイエックス・ナレッジの安藤多喜夫氏である。

インタビューをしたのはいつのことだったか――。

調べると、一九八七年の九月であることが分かった。

「何かの表彰」というのは、毎年十月に行われている情報化月間の「情報化貢献個人」の表彰だった。東京都情報処理産業健康保険組合理事長としての貢献が評価された。その取材をするために、東京・銀座のビルを訪ねたのだった。

そのビルには、しばしば取材で訪れた。安藤氏にはデーター・プロセスコンサルタント（ＤＰＣ：「アイエックス・ナレッジ」に変更する前の社名）の社長としてだけでなく、日本情報センター協会、ソフトウェア産業振興協会の幹部として、あるいは東京都情報処理産業健康保険組合の理事長として、様々なインタビューに応じてもらった。

他のソフト会社が受付や会議室を華美に装っていたのに比べ、なにごとについても思いのほか質素だった印象が残っている。入居していたのが旧いビルで天井が低く、照明がむき出しの蛍光灯だったということもあるであろう。

業界では、その名を縮めて「アンタキさん」と呼ばれ、親しい人はさらに縮めて「アンちゃん」と呼んだ。筆者の記憶の中で、この人はいつも濃紺のスーツに身を包んでいる。

――ソフト業界ナンバーワンのダンディ。

としても知られたが、経営は堅実で、浮ついた投機に走らなかった。

ソフト業界のバブル現象――成金趣味といってもいい――の表れとして、金の指輪、豪奢な社長室、社長専用のベンツ、福利厚生用と称するクルーザーや海外の別荘などが指摘される。実際、安藤氏もクルーザーを保有していた。ところがこの人の場合は、本当の趣味なのだった。

横浜育ちということもあって若いときから海に憧れ、外国航路の船乗りになるのが夢だった。さらに商社マンとして世界を駆ける夢も持った。その夢が、わずかにクルーザーとして結実した。

ちなみに言うと、株式会社コアを創業した種村良平氏も、クルーザー乗りで知られている。種村氏は幼いころから海に憧れ、二百キロを超えるカジキを追い求めて自身の闘志を掻き立てる。この人の場合も、成金的な悪臭はない。本社を芝浦に移した直後、銀座で会う機会があった。

そのとき、

――いまは楽しくて仕方がない。

と話していた。

――高齢者用のパスで市内のバスが無料になる。何十年ぶりかに乗り合いバスに乗って、電車で会社まで行く。これまで運転手つきの社用車で通勤していたから、街の様子とか季節の移り変りに目が行かなかった。毎日が発見の連続だよ。

七十歳を過ぎて、こんなに生き生きした目を持っている人は、そうそういるものではない。

――七十の手習いで大学に通い、論文を書くのが日課。

とも話していた。そのときから一年以上が経っていたが、長い付き合いの中での一年というのは云々するほどの空白ではない。

広報担当者に連絡すると、

――毎日は出社していないのです。

ということだった。

――でも、お伝えしておきます。

その数日後、安藤氏から直接の電話が入った。

取材の主旨を説明すると、安藤氏は

――そういうことなら喜んで。

一も二もなく引き受けてくれた。

約束の日まで、十日ほど余裕があった。

ならば事前に知識を仕入れていくのが鉄則である。一九五六年という年はどういう年だったか。あるいは氏が創業した当時の業界はどのような状況にあったか。

二

一九五六年――。

筆者はもの心すらついていなかったので、世の中に関する記憶はほとんどない。というより関心は別のところにあった。つまり以下は、『日本史年表』（日本歴史学研究会編、一九九四、岩波書店）からの拾い書きである。

ときの首相は鳩山一郎である。前年の十一月に第三次内閣を組閣したばかりだった。

年が明けた一月一日、初詣でごったがえす新潟県弥彦神社で参拝客が将棋倒しとなり、百二十四人が死亡する大惨事が発生した。同じ日、原子力委員会が発足した。

二十六日に、コルチナダンペッツォで開催された第七回冬季オリンピックで、猪谷千春が回転競技で銀メダルを獲得した。ちなみに金メダルを獲得したのは、のちに「スキーをはいた映画スター」になるトニー・ザイラーだった。

二月十一日に高知県の繁藤小学校で、「紀元節式典」が強行されている。日本という国の紀元をめぐって、以後、「歴史的事実か国民感情か」という、端から噛み合うことがない空疎な論争が起きた。戦前の「紀元節」の復活を願う動きは、戦後十年で顕在化していた。

「週刊新潮」が創刊され、同じ月に石坂泰三が経団連会長に就任した。

三月十日、羽田空港の管理がアメリカから日本に移管されている。空の交通は戦後十年を経て、ようやく占領体制から脱した。

四月には日本道路公団が設立され、全国幹線道路網の整備が始まった。一方、モスクワで日ソ漁業交渉がスタートしていた。日本側の代表は農林大臣・河野一郎だった。五月に入って「水俣病」が公式に確認され、公害が社会的な問題となり始めた。

まるで風土病であるかのような名の付いた症状についてこの年の十一月、熊本大学の研究班が「新日本窒素肥料の工場廃水に疑いがある」と発表して物議をかもした。経済発展を優先する政府も産業界も、その事実を認めたくなかった。

五月十九日には科学技術庁が発足し、日本登山隊がマナスルの登頂に成功し、売春防止法が公布され、フィリピン賠償協定が締結されるなど、国民の意識を高揚する出来事と戦後処理が交叉していた。

この年の政治的・社会的な話題は、沖縄における米軍基地問題だった。

前年の九月に沖縄基地所属の米兵が幼女を暴行して殺害する事件が起こっていた。そのこともあって、七月に沖縄県五十六市町村が一丸となる県民大会が開かれた。参加者は十万人を上回わったと伝えられる。沖縄関連では、この年十二月二十六日に行われた那覇市市長選で、沖縄人民党

の瀬長亀次郎が当選している。

瀬長はアメリカの軍政部から危険人物と目され、翌年、布令改正により市長の職を追われた。その後、一九七〇年、沖縄の本土復帰に伴う国政参加選挙で衆院議員に選出され、以後七期連続で当選した。九〇年に引退するまで反米・反戦・反基地の主張を貫いた。

八月、総評は第七回大会で「共産党とは共闘せず」の方針を撤回し、政府との対決姿勢を強めていた。六〇年安保闘争への布石が打たれた。二十五日、佐久間ダム完成。もう一つの政治課題だったソ連との国交回復交渉は、五月十四日にサケ・マス漁業交渉が妥結にいたったものの、七月三十一日に領土交渉が決裂して暗礁に乗り上げた。

九月に入って、財界が鳩山一郎に首相引退を勧告したのがきっかけとなって、鳩山はソ連のブルガーニン首相に交渉再開を申し入れた。十月十九日、両国は国交回復に関する共同声明を発表し、十二月十二日に批准書を交換した。

十二月十四日、自民党大会で石橋湛山が総裁に選出され、鳩山内閣は同月二十日に総辞職した。強引に鳩山を引きずり降ろしたが、石橋内閣は六十三日しか続かなかった。結果として石橋は、保守本流を自認する岸信介の長期政権を用意する役割を果たした。

国際社会では、五月にアメリカがビキニ環礁で初の水爆実験を行った。

おりからの梅雨どき、小学校の同級生と

――雨に濡れると禿げるぞ。

――放射能が入ってるからな。

――「黒い雨」っていうけど、ちっとも黒くないじゃんか。

などと言い合ったものだった。

スーダン、モロッコ、チュニジアが独立し、七月にエジプト大統領ナセルが米英の圧力を排除すべくスエズ運河の国有化を宣言し、対してアメリカはアスワン・ハイ・ダム建設の援助を打ち切った。これがきっかけとなって中東に緊張感が高まり、十月になるとイスラエル軍がシナイ半島に進攻して「スエズ戦争」が勃発した。

東欧ではハンガリーの首相ナジ・イムレがワルシャワ条約機構からの離脱を表明、これに対してソ連が軍事介入し、東西陣営に緊張感が高まった。米ソ冷戦の構図のなかで、中東と東欧が焦点となった。

流行歌「別れの一本杉」（春日八郎）、小説『鍵』（谷崎潤一郎）、『金閣寺』（三島由紀夫）。

経済企画庁が『経済白書』で使った「もはや戦後ではない」が流行語となった。だが庶民の実感としては、戦後の残照がいまだに強かった。

三

かすかに、このころの記憶がある。

このとき筆者は神奈川県の町に住んでいた。旧日本帝国海軍が払い下げた住まいの周りは一面の田んぼだった。遠くに富士山が見え、用水が流れる小川にはザリガニ、メダカ、小鮒、タニシなどがいて、木の枝に裁縫の糸を結んで垂らすだけで、面白いようにザリガニが釣れた。

あるとき、それが埋め立てられた。土砂の中に、キラキラ光るものがあった。割れ口が滑らかなガラスのかけらで、日にかざすと虹の色が見えた。敗戦で破壊された日本軍戦闘機の防風ガラス――ということを、しばらくして知った。

小高い山の裾に、縦に長い穴の口がいくつも開いていた。涼しいので、夏になると中で遊んだ。大人たちが、「ボークーゴーの中で遊んではいけない」と言った。防空壕のことである。

この年の夏、小学校の休みを利用して大阪を訪れた。白髪の祖父に連れられて歩いたのは、おそらく心斎橋あたりであったろう。やや長じて、戦前、母の実家は代々、船場で回船問屋と口入れ屋を営んでいた、ということを聞いた。祖父は、最後の店主だったことになる。

もっとも、その連れ合い（つまり祖母）によると、

――仕事らし仕事はな～んもせんで、遊び呆けてましたがな。いつまでも「ボン」と呼ばれてましてな。

浪花節、浄瑠璃、義太夫に凝り、「浪花亭鬼鶴」の異名があった。料亭を借り上げて襲名披露までやった。そのとき参集した一同で撮った写真が残っていた。

――戦災で店が焼けて、身上をぜ～んぶ無くして、アタシはそれはそれは苦労しました。

だそうである。

戦争が終わって外地から引き上げてきた元奉公人が、旧主を頼ってやってきてそのまま居候になった。間口二間・二階建六畳三間の棟割長屋に、家族六人と元奉公人、合計十四人が同居していたという話に驚いた記憶がある。

孫がはるばるやって来たのを幸い、かつて馴染みの心斎橋だかの繁華街に出かけ、上等な好物を食べられるとあって、当人は浮き浮きしていたに違いない。

その祖父に、幼かったわたしが尋ねた。

「あの人たちは何？」

街頭に軍隊の帽子をかぶり、白衣をまとった人が、ハーモニカを吹き、アコーディオンを弾いていた。空き缶を前に置いて、両手をついている人もいた。そういう人は片足がなかったり、二の腕から先が金属のフックであったりし

た。顔の半分が火傷のケロイドで崩れている人もいた。
かすかに怯えた。
街を行く人々に物乞いをしていたのだ。
ショーイグンジン。
「傷痍軍人」と書くのだということは分からなかった。
戦争で傷ついた人たちに、国は冷淡だった。
事情は何も分からなかったが、その前を通り過ぎるとき、なぜか痛々しく、後ろめたい気持ちがした。大人たち――一緒に歩いている両親ばかりでなく、街中の「健全な」生活を送っている人々――の空気が伝わってきたのだろう。
経済企画庁も、そのことは十分すぎるほど分かっていたはずだった。しかし、向こう五年先を常に見据えるのが政策というものであることからすれば、「もはや戦後ではない」という表現を使ったのは無理もないことだったかもしれない。
対して電子計算機は、真空管式が主力になりつつあったが、国産メーカーは真空管、リレー、パラメトロン、トランジスターのそれぞれを脈絡もなく個別に試作しているのが実態だった。つまり演算素子としてどれを主軸にすえるか、明快な方向性は示されていなかった。
そうした中で通産省は機械工業審議会電子工業振興特別部会をテコに、「電子工業振興臨時措置法」や電子工業課の新設などを模索しようとしたわけだった。
なるほど、卒論のイントロダクションにふさわしい。

～～～～　補　注　～～～～

東京都情報処理産業健康保険組合　東京都情報サービス産業健康保険組合（ＴＪＫ）の前身。

データー・プロセスコンサルタント　ＤＰＣ：一九九〇年、社名を「アイエックス」に改め、九九年十月に日本ナレッジ・インダストリと合併して「アイエックス・ナレッジ」と改称した。

鳩山一郎　はとやま・いちろう／１８８３～１９５５。一九〇七年に東京帝国大学法学部を卒業し弁護士から衆院議員となった。第二次大戦前に政友会幹事長、田中義一内閣で書記官長、犬養内閣、斉藤内閣で文相を務めた。五二年公職追放から政界に復帰し、日本民主党を結成して五四年十二月に首相となった。

猪谷千春　いがや・ちはる／１９３２～　：千島列島の国後島に生まれ、三歳からスキーの英才教育を受けた。十六歳のとき東京・銀座のスポーツ用具店でＡＩＵ生命保険の創業者であるコーネリアス・スターと知り合い、それがきっかけとなって海外のスキー大会を転戦した。

トニー・ザイラー　Anton Sailer／１９３５～２００９。オーストリアのキッツビューエルという町に生まれ、一九五六年のコルチナ・ダンペッツォ冬季オリンピックで三種目に金メダルを獲得した。のち映画俳優に転身した。

この国の紀元　初代・神武天皇の即位は、『書紀』では「辛酉年春正月庚辰朔」すなわち一月一日であって、二月十一日ではない。明治初年、グレオリオ暦に移行した際、『大日本史』を編集していた藤田一正が「陰暦一月一日は太陽暦の二月十一日に相当」とした。

石坂泰三　いしざか・たいぞう／１８８６～１９７５。東京帝国大学大学院を経て逓信省に入り、一九一五年第一生命社長・矢野恒太の秘書となった。三八～四六年第一生命社長、四九年東芝社長、五六年経団連会長に就任した。五八年アラビア石油会長、六八年大阪万国博覧会会長を務めた。

水俣病　一九五三年から五九年にかけて熊本県水俣地方に発生した公害病。

瀬長亀次郎　せなが・かめじろう／１９０７～２００１。

石橋湛山　いしばし・たんざん／１８８４～１９７３。日蓮宗久遠寺宗主の長男として東京で生まれ、一九〇七年早稲田大学を出て東洋経済新報社に入った。大正デモクラシー、普通選挙期成同盟会の活動家として知られ、第二次大戦後の四六年、日本自由党に加わった。鳩山内閣で通産相を務め、五六年十二月に首相となったが、病気を理由に二か月余で総辞職した。

ビキニ環礁　米軍が行った水爆実験は、広島に投下された原子爆弾「リトル・ボーイ」の一千倍を上回る放射能を大気中に放出した。近くで操業中だった日本のマグロ延縄漁船「第五福竜丸」が死の灰を浴び、乗組員二十三人が急性放射能症にかかった。第五福竜丸は東京・夢の島にある展示館に保存されている。

ナジ・イムレ　Nagy Imre／１８９６～１９５８。

ソ連の軍事介入　いわゆるハンガリー動乱。ハンガリー共産党の強権滴支配に反対する市民三千人が亡くなったとされる。

経済企画庁　総理府の外局で長期経済計画の策定を中心に、中央省庁の経済政策の調整や関連事項の調査研究を行った。一九四六年（昭和二十一）八月に設置された経済安定本部を前身に、一九

五五年（昭和三十）経済審議庁から改称した。

電子工業振興臨時措置法　一九五五年四月に財団法人電波技術協会に電子計算機調査委員会（委員長・山下英男）が設置され、電子計算機の調査が開始された。通産省はこれを受けて一九五七年六月に電子工業振興臨時措置法（電振法）を制定し、電子計算機およびその周辺装置の開発研究、生産合理化などに対して補助金交付や設備合理化融資が行われた。

日本IT書紀　012 記憶の箱

著　者：佃 均

発行者：（特非）オープンソースソフトウェア協会
http://www.ossaj.org/
info@ossaj.org

発行日：2023年4月10日

本作品は2004年-2005年ナレイ出版局より刊行された「日本 IT書紀」全5分冊を底本とし、原著者が一部改定を加えたものを複数の電子書籍に再構成して CC-BY-NC-ND ライセンスにより公開します。

© 2004 TSUKUDA Hitoshi (Licensed under CC BY NC ND 4.0)

本作品はCC-BY-NC-NDライセンスによって許諾されています。ライセンスの詳しい内容は https://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/deed.ja でご確認ください。